

令和3年6月14日

## 京口門だより No.92

今年はえらく早く梅雨入りが宣言されました。確かに雨はまだ多くなくても空気は湿気をふくんでいて重く感じます。室内の湿度計は60~70%を示しています。コロナ感染症もワクチン接種が進んで、やや感染の鈍化傾向がみられます。変異株がどうか心配するむきもありますが、このまま流行の収束に向って欲しいと思います。「樹も草もしづかにて梅雨はじまりぬ」(日野草城)

この梅雨の時期になると漢方では「湿熱」という病名が思いだされます。湿とはいわゆるこの梅雨のようなジメジメした湿気、低い土地や深い洞窟のような場所でみられるものです。熱とは熱気があることを意味し、今日では身体に起こっている炎症を指していると思われます。具体的には関節や筋肉の病気、口腔の口内炎、下痢などの胃腸の病気、ある種の皮膚病、あるいは陰部や肛門の病気、一部の肝臓胆のうの病気などを指しています。たとえば湿度の高い時期には膝などの関節痛に悪影響があり、漢方では湿を除く蒼朮(ホソバオケラの根)や熱をとる石膏(カルシウム化合物)などを使います。あるいは陰部は湿気をよく含んでいますから何か炎症が起きると湿熱の病気となります。それには竜胆(リンドウの根)や車前子(オオバコの実)を使います。皮膚病でも水疱ができたり、分泌物の多い湿疹などはこの湿熱の病気に含まれます。しばしば黄連(オウレンの根)や茵陳蒿(インチンコウ、カワラヨモギの葉)などを使います。

とくに治りにくい皮膚病では病名にかかわらず、しばしば副腎ステロイドの外用薬が処方されますし。強力なステロイド剤を一気に使って減量すればよいとされていますが、なかなかうまく治らないケースが多く見られます。それはステロイド剤の使い方や患者さん自身の使い方が悪いなどと説明されますが、どうも納得できない面があ

ります。こうした場合にはただ皮膚の炎症を抑え込むことに主眼のある現代医学の治療よりも、漢方医学ではさきに述べた湿熱の治療や、瘀血といって血流のうっ滞を改善する薬など、漢方医学独特の見方によって治りにくい皮膚病に対処してゆくと、案外優れた効果を現わしてきます。

現代医学も病気の原因に基いてさまざまな治療薬が開発されていますが、それとは違った見方に従って治療する漢方医学をぜひ試みていただきたいと思います。それは皮膚病に限らず多くの病気についても言えることです。

